

アメリカ黒人女性教育者の遺産

—小学校の名称となったナニー・ヘレン・バロウズを中心に—

岩 本 裕 子 ※

要約

黒人教育のために生涯を捧げたアメリカ黒人女性教育者ナニー・ヘレン・バロウズ（1879-1961）は、教育の出発点を3Bとした。聖書（BIBLE）、浴室（BATH）、ほうき（BROOM）で、キリスト教信仰に基づき、生活を支えるために働くことができる子女を育てた。1909年に創設した職業訓練学校は、大きく発展してバロウズは亡くなるまで校長を務めた。死後3年目にはその学校は、彼女の名前を冠した私立小学校となり、首都ワシントン郊外に現存する。

20世紀前半、黒人教育と黒人女性の向上のために生涯を捧げたバロウズは、同時代の黒人女性活動家たちと交流、連携しながら、互いに支え合って人種の向上に貢献した。特にメアリ・マクロード・ベシューンとの直筆書簡を読む機会を得、彼女たちの強い想いを確信できた。教育こそ自らの人種の向上にもっとも重要だとして、教育者として実践を続けたバロウズの遺産を確認していきたい。

キーワード ナニー・ヘレン・バロウズ アメリカ黒人女性 教育者

目次

1. はじめに
2. ナニー・ヘレン・バロウズの思想と教育観
 - 2.1 教育者バロウズ（1879-1961）：活動の始まりとその時代
 - 2.2 「肌の色ではなく人格こそ大切！」（1904）
 - 2.3 「黒人教会とは黒人女性を意味する」（1915）
3. バロウズと黒人初等教育
 - 3.1 「三つのBのための学校」創設（1909）
 - 3.2 「全く不可能と思われることに挑戦する」
 - 3.3 『黒人が自分のためにすべき12のこと』（1900's）
4. 同時代の黒人女性活動家たちとの交流と連携
 - 4.1 「バロウズ文書」とバロウズの命名遺産
 - 4.2 メアリ・ベシューンとの交流と連携
 - 4.3 ナニー・ヘレン・バロウズ・プロジェクト
5. おわりに

1. はじめに

本学が学校教育学科を開設できた2017年夏は、政情不安定な世界情勢であった。2016年にはシリア難民受け入れを数年来の政治争点とした欧州、まさかのBREXITを引き起こした英国、さらに大西洋を越えてもう一つの「まさか」のトランプ大統領誕生^[1]と、これらを引き受けた2017年の世界情勢は、民主主義体制だけで解決できない状況にある。

米国では、8月12日に、ヴァージニア州シャーロットツビル（Charlottesville, Va.）で、民衆間の衝突が起こった。南北戦争の南軍総司令官だったリー将軍の銅像撤去をめぐる騒動であった。この街にはヴァージニア大学があり、郊外には同大学の創設者であるトマス・ジェファソン（Thomas Jefferson）の邸宅で彼の墓もあるモンティチェロ（Monticello）が、国家遺産となって多くの観光客を迎えている。米国の5セント硬貨の表にはジェファソンの顔、裏面にはこのモンティチェロが描かれている。日常的には使われていないが、現存する2ドル紙幣にもやはり表面にジェファソン、裏面にはモンティチェロが描かれている。

ジェファソンと言えば、アメリカ独立宣言草案作成者で、のちに第3代大統領となった人物である。モンティチェロの農園主でもあり、同時に農園には多くの奴隷を抱えた奴隷主でもあった^[2]。対立感情共存（ambivalent）の上で、独立宣言前文には「生命、自由、幸福の追求」（life, liberty, pursuit of happiness）を人間の最低限保証されなければならないものだとし、「すべての人間は平等に作られている」（All men are created equal.）と高らかに謳った。後者の文言は、福沢諭吉の『学問のすすめ』によって、日本では「天は人の上に人を造らず人の下に人を造らず」と紹介された。

KKK（Ku Klux Klan）に代表されるいわゆる白人至上主義者（white supremacists）と呼ばれる人々は、2016年大統領選挙でトランプ候補を支え、トランプ大統領誕生によって彼らの主義主張を声高に叫ぶようになった。その代表的な例が2017年夏前述したシャーロットツビルの騒動で、車の暴走によって怪我人ばかりか死者を一人出してしまった。さらに「双方とも悪い」（I watched those very closely.）というトランプ発言を受けて、アメリカ政財界でも物議を醸し続けている。

人種差別が表面化して、21世紀のアメリカ社会において分断が問われている。1865年に憲法修正第13条^[3]が通過して、アメリカ社会から奴隷制度が廃止されて以降、従来の区別ではなく差別へと移行した。奴隷でないだけで人間扱いされず、政治的、社会的権利を次々剥奪され、KKKを始めとして南部白人による黒人リンチという、肉体的危険にもさらされたのが19世紀末であった。そのKKKが21世紀の現在表面化し、白人による黒人差別は健在であったことを露呈した。

こうした差別と闘いながら、人種の誇りを保ち、教育という手段で人種の向上、特に子女の知的向上に努めたアメリカ黒人女性教育者ナニー・ヘレン・バロウズ（Nannie Helen Burroughs）の「遺産」を再確認することが本稿の目的である。バロウズのみに限定した筆者執筆論考は、2001年に史料整理をした「覚え書き」に留まるが、他に6種の紹介文を発

表してきた^[4]。本稿では従来の拙稿をまとめつつ、2017年夏に行った合衆国国会図書館手書き文書館と、ニューヨーク公立図書館ハーレム分館ションバーグセンターでの史料収集に基づき、バロウズの遺産をまとめていく。

2. ナニー・ヘレン・バロウズの思想と教育観

2.1 教育者バロウズ (1879-1961)：活動の始まりとその時代

奴隷制時代の黒人奴隷にとって、教育は「自由」を獲得する近道であった。憲法修正第13条通過以降、奴隷でなくなり自由を獲得したとはいうものの、経済的、政治的、社会的状況は奴隷制時代以上に厳しく、19世紀末のことをアメリカ黒人史の「どん底時代 (nadir)」と称した黒人歴史家がいたほどである^[5]。どん底時代にあって「教育」は必要不可欠な重要事項だった。

20世紀転換期に活躍した黒人女性活動家たちは、教育の必要性に活動当初から気づいて、黒人社会での子どもたちへの教育、女性への啓発を行った。ナニー・ヘレン・バロウズもその一人だった。3.3で検討する1900年代にバロウズによって書かれた『黒人が自分のためにすべき12のこと』の第1条は「黒人は最初にすべきことがいかに重要かをわからなければならない。最初にすべきことは教育である」^[6]と説いている。教育こそ、人種の状況改善、向上への近道であることを20歳代で熟知し、自分のなすべきことに邁進していったのであろう。バロウズが教育者となるまでの経歴を確認しておく。

バロウズは、1879年5月にヴァージニア州オレンジ (Orange, Va.) で生まれた。元奴隷であった両親、ジョンとジェニーの間に生まれた二人娘の一人だった。妹は生後まもなく亡くなったので結果的にバロウズは一人娘となった。バロウズの父方も母方も祖父は、南北戦争後土地を取得できた解放黒人だった。父親ジョンは、農民と同時に巡回説教師でもあったが、バロウズが幼少時に亡くなってしまった。バロウズ自身も、7歳で腸チフスにかかり4年間学校へ通うことができなかった。夫に先立たれ病弱な一人娘を抱えた母ジェニーは、娘により高い教育の機会を与えたいと、首都ワシントンDCへ移ったのだった^[7]。

バロウズは、この母のことを「この世で最も強く賢明な女性」と表現した。この母なくしてバロウズなし、ということである。この母子での転居はバロウズには良い機会となったようで、DC内の公立学校で熱心に学び、1年間で2学年進級を達成するなど、才能を発揮して、名門Mストリート高校 (M Street High School) へ進学できた。同校は、1916年に黒人詩人ポール・ローレンス・ダンバー (Paul Laurence Dunbar) の名前を冠する高校名に変更して現在に至っている。

この高校で教鞭を執った黒人女性には著名人が多い。1862年に黒人女性で初めてオーバリン大学 (Oberlin College) の卒業生となったメアリ・パターソン (Mary Jane Patterson) を筆頭に、1896年に全米黒人女性協会 (National Association of Colored Women: NACW) 初代会長となるメアリ・チャーチ・テレル (Mary Church Terrell) や1892年には『南部からの声』 (*Voice from the South*) を出版するアンナ・ジュリア・クーパー (Anna Julia

Cooper)^[8]が教壇に立った。バロウズにとって、人生の模範 (role model) ともなる黒人女性教育者たちとの出会いによって、教育者となるべき道が見えた高校生活だったことだろう。Mストリート高校では新進の弁論能力を発揮した。また敬虔なクリスチャンとして、19丁目バプティスト教会 (The Nineteenth Street Baptist Church: 1896年にNACW創設会場となった教会) のプログラムに積極的に参加して、厳しい状況にある黒人のために活動した。

高校卒業後のバロウズは、大きな失望を経験し、その失望こそが彼女の人生のエネルギーとなっていった。高校の家庭科教師から卒業後は助手職に就くよう約束されていたにも拘わらず、反故にされてしまったのだった。将来の家庭科教師への道を期待していたバロウズは、彼女の肌の色と同時に、彼女には強い推薦者がいないことなどを約束不履行の理由とされた。「偏見や無視は死ぬまで続くという賽は投げられた」と書き残し、その逆境に屈しない人生を歩むことになるのだった。

縁故に頼れない就職活動を開始し、19世紀末の黒人男性教育者ブッカー・T・ワシントン (Booker T. Washington) が開設したアラバマ州のタスキーギ専門学校 (Tuskegee Institute) で事務職に採用されないかどうか、ワシントンに手紙を送ったりもした。様々な努力の結果、フィラデルフィアへ移って、事務職を見つけながら、ユニオン・バプティスト教会のルイス・ジョーダン牧師 (Rev. Lewis G. Jordan) の手伝いをするという進路を決めたのだった。

その後、ジョーダン牧師がケンタッキー州ルイヴィル (Louisville, Ky.) へ移ったため、彼に付いてルイヴィルへ行き、当地で女性のためのクラブを創設した。教会では夜学を開き、裁縫、タイプ、料理、簿記といった実学を学ぶ講座を開設し、教育者となる出発点に立った。肌の色を理由に職を得られなかった「失望」や逆境を自らのエネルギーに替えて、新たな人生を歩み始めたときのバロウズは、20歳になったばかり、19世紀終了が近づく頃だった。

2.2 「肌の色ではなく人格こそ大切！」(1904)

同時代の知識人との交流を証明するように、シカゴで創刊された急進的な黒人月刊誌『黒人の声』誌 (*The Voice of the Negro*) が、1904年の7月に女性特集号を組んだときには、多くの女性知識人たちと共にバロウズも投稿した。20世紀初頭という時代の流行や黒人大衆の傾向を憂いながら「肌の色ではなく人格こそ大切！」(“Not Color but Character”) と題する投稿記事を寄せている^[9]。

「白人大衆が黒人恐怖症であるのと同じくらいひどいことは、多くの黒人が肌の色恐怖症 (colorphobia) になっていることである」と議論を始めて「顔の色を白くし、髪を直毛にすることに何の意味があるのだろうか」と問いかけたのだった。「白い顔で直毛だということは、黒人でありながら白人のようになりたい、という願望を表している。黒人が肌の色恐怖症になっていることは否定できない。男性も女性も、家庭も、さらに黒人教会も(「神よ、このような教会から我々を守り給え」と書き加えている)、社会的な集まりにおいても同様である」と嘆く。「肌の色に何の意味があるのだろうか」と再び繰り返し問うた後に「黒い

黒人より色白の黒人の方が道徳的に勝るなどということはないし、純潔の黒人ということとは世界中のどこを探しても存在しない。少しでも白い方がより良いかのように、何の根拠も持たず言われているが、肌の色は精神の崇高さを表す象徴ではない」と断言したのであった。

さらに黒人男性が肌の色のより白い黒人女性と結婚したがっている事実を憂慮して、女性の肌の色と人格とは何の関係もないことを強調して「真の女性というものは、このような見かけにこだわったり、見かけで人格を判断したりするものではない。重要なのは見かけではなく精神である。つまり肌の色ではなく、人格こそ大切なのだ！我々が自分たちの基準を高くあげていき、黒人女性という言葉が人格の高潔さや目的の高尚さという語と同義となるように、神のご加護あれ」と結んでいる。

美に関する白人の基準に対して黒人が張り合うことを、バロウズは否定している。見かけをより白人に近づけようとする同時代の多くの黒人女性たちを非難もしている。黒人女性に課せられた人種と性の二重の抑圧に対して、自らに誇りを持つことで前向きに生きてほしいと主張しているのだろう。『黒人の声』投稿から5年後の1909年には、職業訓練学校を作って同時代の黒人女性に職業訓練を行う教育者となっていくバロウズが、彼女たちに向かって声を大にして何を呼びかけたかは、容易に想像できる。

バロウズの人種に対して誇りをもつ意識は、1920年代に入ってアフリカ帰還運動を展開するジャマイカ生まれの黒人指導者マーカス・ガーヴェイの主張に先行するものであった。ガーヴェイ運動と呼ばれて、黒人大衆から熱狂的な支持を得たこの運動と同じ主張をすでに15年以上前にバロウズが行っていたことになる。時代を先取りしすぎていたのだろうか^[10]。

2.3 「黒人教会とは黒人女性を意味する」(1915)

バロウズの活動が、キリスト教の立場を貫いたことは、2.1で言及したようにユニオン・バプティスト教会のルイス・ジョーダン牧師支持でも明らかだった。全国バプティスト会議(The National Baptist Convention: NBC) 年次大会参加のために、レイヴィルからリッチモンド(Richmond, Va.)へ旅したのは1900年、バロウズが21歳の時だった。この会議の中でバロウズは「いかに姉妹たちへの援助が妨げられてきたか」(“How the Sisters Are Hindered from Helping”)と題するスピーチを行い、黒人女性の長く堪え忍んだ屈従の日々を訴え、教会においても女性には重要な役割を果たせていない事実を告発した。バロウズの存在を全米で有名にしたこのスピーチは、女性会議(Woman's Conference: WC)創設のきっかけともなった。

WCでは通信係に選ばれ、着任初年度だけで215のスピーチをこなし、12の支部を増やしていった。1903年までに会員を100万人とし、4年後の1907年までに150万人にまでした。1948年まで通信係に再選され続け、1948年からは会長職に就いた。一度も結婚しないまま、まるでWCに捧げたかのような人生を送るのだった。

WCの活動目標は、女性参政権獲得や経済的平等に向けられたが、人種的な立場から、リンチに代表される不正との闘い、人種隔離制度や雇用差別との闘いも続けたのだった。女性

参政権の必要性を説いたバロウズの文章の中で「黒人女性が投票権を獲得すれば、白人女性よりも黒人男性よりも有効に賢く使うだろう」と述べた。黒人女性に向けられた悪印象を打破するため、すなわち道徳的擁護の武器として、さらには健康な社会生活のために、女性参政権は有効であると力説したのだった。

ここで強調された女性参政権運動が熟してくる1910年代に、全国黒人地位向上協会（The National Association for the Advancement of the Colored People: NAACP）の機関誌『クライシス』（*The Crisis*）では女性参政権特集号が2度、小さなものを含むと3度企画された。NAACPの構成メンバー通り、黒人男女ばかりではなく、白人男女の投稿も含めて時代を反映した議論が展開された。『クライシス』の1915年の特集号では、総勢26名の投稿が掲載され、そのうち黒人女性は15人で、バロウズもその一人だった。

黒人女性の道徳的擁護の手段として参政権が有効であると論じる「黒人女性と改革」と題する投稿では、「黒人教会とは黒人女性を意味する」と始めている。500近くある黒人教会を支えているのは黒人女性で、道徳的、精神的、さらに経済的にも彼女たちが支えていると力説した。健康的な社会生活のために、また自分たち自身の擁護のために、参政権の必要性を繰り返したのだった^[11]。

3. バロウズと黒人初等教育

3.1 「三つのBのための学校」創設（1909）

「いかに姉妹たちへの援助が妨げられてきたか」のスピーチによって、わずか21歳の若さながら黒人社会で有名になったバロウズは、NBCやWCのための活動を続けながら、自ら黒人初等教育に携われる学校作りを始めた。1901年時点で、すでにこの学校の構想はあったらしく、WCのメンバーにその構想を話していた。

実現したのは、1909年10月19日で、黒人少女のための職業訓練学校、全米婦女子訓練学校（National Training School for Women and Girls）が創設された。校長として教育にあたり、生徒35人での出発だったが、四半世紀後には生徒数は2000人を超え、全米ばかりかアフリカやカリブ海諸島から集まり、高校や短大レベルの入学人数であった。経済的援助はNBCの女性団体、すなわちWCによってなされた。同時代の黒人女性たちからの経済的援助に関しては、4.2でもさらに検討する。

バロウズはこの学校を「三つのBのための学校」と呼んだ。「聖書」（BIBLE）、「浴室」（BATH）、「全ての労働の象徴「ほうき」（BROOM）の三つである。人種の向上のためにはこの三つが必須として「働いて、あなた自身を支えなさい、自分の力をアピールしなさい」を設立当初のモットーとして、自助（self-help）のための実学教育を行った。このモットーは、後に次節で紹介するモットーへ替わるが、趣旨は同じだった。黒人女性にとって、経済的に自活していくために実学を身につけることがもっとも重要な課題だと、バロウズは考えたのだった。

奴隷解放後の南部黒人には、自助のための実学教育こそ必要だという思想は、2.1で言

及したブッカー・T・ワシントンによってすでに説かれていた。高校を卒業したバロウズが就職活動したと紹介したアラバマ州タスキーギ専門学校は、ワシントンの思想の実践場として開設されていた^[12]。バロウズの実践を「女性版ブッカー・T・ワシントン」と称されることもある。ワシントンの実業教育が、職業差別によって仕事に容易に就けない南部黒人の現状打破の対策であったように、バロウズも黒人女性の自活のために、教養教育ではなく実学教育を選んだのだろう。

実用的なカリキュラムだけでなく、その教育の根底には常にキリスト教的思想があった。料理人、洗濯人、ホテルの部屋係、看護師、家政婦などになるための、基本的な家事労働を教えながら、洋裁、事務、簿記、速記といった専門技術も教えた。さらに従来の女性の仕事領域を超えて、印刷工、理髪師、靴修理工などの技術も教えた。

3.2 「全く不可能と思われることに挑戦する」

前述したように、バロウズの学校モットーは「働いて、あなた自身を支えなさい、自分の力をアピールしなさい」から、さらに強固なモットーに変更された。困難を覚悟で不可能に挑戦しようという心意気、しかも不可能を可能にすることこそ目的だとバロウズは考えて、モットーを「全くできそうにないことこそ、私たちの専門とするところである」(“We Specialize in Wholly Impossible”)としたのだった。

「働くことを軽蔑したり、労働者を蔑視してはいけない」とバロウズは語ったことがあり、「黒人女性を働く気持ちにさせないのは、仕事が白人家庭での家内労働だからではなく、黒人差別にあうからという理由だろう」と語り、同じ仕事でも単純労働の使用人ではなく、家事労働においてもプロ意識を持てるだけの技術を身につけることを主張したのだった^[13]。

この表現は、20世紀末に黒人女性史研究読本のタイトルにも使われたり、論文のタイトルに用いられたりした^[14]。歴史研究においても、1970年代まではアメリカ史で黒人史が過小評価、黒人史では黒人女性史は過小評価、女性史では白人女性史が主流、という状態で黒人女性史研究そのものに光が当たるのは21世紀転換期まで待つことになる。「なぜナニー・ヘレン・バロウズのことをこれまで知らなかったのだろうか？」という素朴な疑問を投げかけたHPを最終節4.3で検討して、後世への影響を確認する。

不可能と思えることを可能にしていくために、まず何をしなければならないのか、教育者として出発する時点ですでにバロウズには提案があった。黒人社会を凝視、静観しながら、黒人たちがどのように暮らさなければならないか、どのように暮らせば自分たちの生活が改善されるか、バロウズは12項目列挙したのだった。

3.3 『黒人が自分のためにすべき12のこと』(1900's)

1900年代にはバロウズ自身によって書き残されたとされるこの12項目は、バロウズの死後7年過ぎた1968年に再版された。小冊子のタイトルは、*12 Things the Negro must do for himself and 12 Things White People must stop doing to the Negro*となり、単に黒人へ

の訓告に留まらず、差別をする白人側への警告ともなっていた。この再版小冊子に書かれた作者バロウズの説明は「夢想家、労働者、組織者、作家、建設者、会計者、講演者、傑出した学校後援者」となっていた。さらに「著者はアメリカ黒人と白人が、世界平和に貢献し、世界の人種間における友好親善を築く日の来ることを夢見ている」^[15]と書かれている。

本節ではこの12項目を紹介する。バロウズが教育者としての歩みを始めた1900年代においてすでに、60年以上後の1963年8月28日^[16]のワシントン大行進でのキング牧師の演説にも匹敵する内容だったことを確認していきたい。

1. 黒人は最初にすべきことがいかに重要かをわからなければならない。最初にすべきことは教育、生活習慣の改善、仕事や家庭の自立である。
2. 黒人は自分のために自分でできることをしないで、神様に期待したり白人の知人にしてもらおうと考えてはいけない。
3. 黒人は自分自身を律しなければならない。自分の子どもたちや家を清潔にし、快適で魅力的な暮らしができるよう身の回りを整えなければならない。
4. 黒人は仕事と余暇を区別して、それぞれにふさわしい身だしなみをしなければならない。
5. 黒人は信仰を毎日の勤めと考えるべきで、感情的な理由だけで日曜礼拝に参加するだけに留まってはいけない。
6. 黒人は民衆からの無視を完全になくすために、効果的な解決策を取らなければならない。その解決策とは次のようなことである。
 - ・指導者たちは民衆が精神的、道徳的に改善していけるよう、民衆を良い市民になれるよう指導すべきである。
 - ・アフリカだけでなくアメリカの読み書き能力達成に着手すべきである。無視、無関心は人種の向上にもっとも重荷になる。
 - ・社会的結合は血縁親類の関係からの広がりである。
 - ・孤独だったり法律で解決できない縁者による融合こそが大切である。
7. 黒人は肌の色や、白人からの態度による自分の失敗を責めるのを止めるべきである。
8. 黒人は自分の悪い職癖を克服しなければならない。
9. 黒人は公の場所で品行方正でなければならない。
10. 黒人は人と接する方法を学ばなければならない。単に黒人社会だけでなく、すべての人々と接する方法である。
11. 平均的な、言わば教育を受けた黒人は、預言者エゼキエルが霊によって引き上げられたように、引き上げられて悪人のそばに連れて行かれる。そこで悪人を良い方向に導く役割をしなければならない。(旧約聖書エゼキエル書3:14-19)
12. 黒人は自分の友人の存在を忘れてはいけない。覚えておくように！
 - ・「あなたはエジプトで奴隷であったが、あなたの神、主が救い出してくださったことを思い起こしなさい。わたしはそれゆえ、あなたにこのことを行うように命じるのであ

る」(旧約聖書申命記24:18)との言葉通り、神は常にあなたのそばにいる。アメリカ黒人は南部だけでなく北部にも友人がいたことを忘れてはいけない。働くことの高潔さを自覚しながら、まずは働きなさい！これが我々を苦しめようとするすべてのものへの回答になる。

以上の12項目をバロウズに語らせたのは、2.1で言及した「失望」に端を発した彼女の経験であろう。期待していた職を得られなかった事実、自らの肌の色や縁故がないことが原因で約束を反故にされた経験は、そのまま失望を絶望に終わらせることなく、希望に替えるべく彼女は「偏見や無視は死ぬまで続くという賽は投げられた」と自覚して、いい意味開き直り、逆境に屈しない人生を生きようと決めたのだろう。

この12項目は、単に黒人のみでなくすべての人間としての「なすべきこと」と言えるだろう。黒人の場合、アメリカ社会で白人から言われなき差別を受けている現実の中で、白人たちから後ろ指を指されることなく毅然と生きていけるように、というバロウズなりの願いだったのだろう。ただ、教育を受けて一角の成功を収めたり、真面目に生きて経済的に豊かになっただけでリンチの対象となった1890年代のことを思い返すと、この12項目によってどのくらいの黒人たちが救われたのかと残念にも思う。

肌の色を理由に差別される「どん底時代」にあって、バロウズは差別する白人を非難する前に、黒人たちに自らの生き方を振り返るように指摘を続けたのだった。人としての生き方そのものを正すことによって、高潔さを保ち労働に向き合う生き方を提案したのだろう。バロウズ自らも12項目のように人生を生きることで、彼女自身の生活や人生を支え、守ってきたに違いない。この12項目を守り抜くことで、彼女は人生の階段を一段一段上り続けたのである。

2017年夏のションバーグセンターで手に取ることができた史料に、1984年出版の定期刊行物があった。[写真1] 同年9月24～28日に開催された75周年記念大会(Diamond Jubilee)の学会報である。つ

まり全米婦女子訓練学校として1909年に創設されて丁度75年目を迎えた記念大会が開催されたときの会報である。表紙を開けてすぐの頁[写真2]には、「負の山を動かそう—必ずできる!」と6項目の「負の山」の絵が描かれている。

①無知な自分に安住 ②偏見 ③低い生活水準 ④不正 ⑤貧困 ⑥怠慢

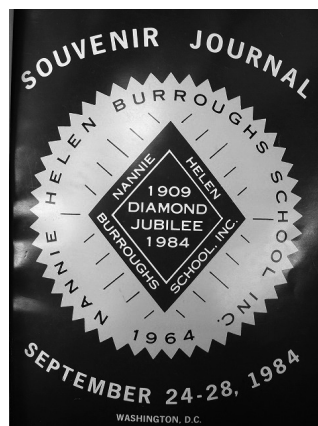


写真1
創設75周年記念大会会報表紙

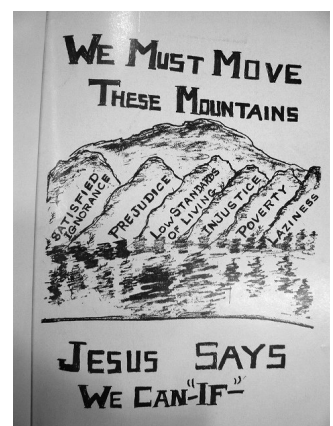


写真2
創設75周年記念大会会報1頁

これらの負の山は、前述した12項目を克服すれば容易に動かすことができる項目のように思える。訓練学校の当初のモットーであった3 Bは、言い換えれば生活そのものの改善を意味する。つまり、Bibleとは生活を清くする (Clean lives)、Bathは身体を清潔にする (Clean bodies)、最後のBroomは、家をきれいにする (Clean home) ことを意味するのだった。つまり、3 Bとは3 Cを意味し、生活、身体、家という個々の暮らしを整える (Clean) ことが、生活の向上に直結しているという意味だったのである。バロウズは、心身共に清潔に清らかに生きていくように、同時代の黒人たちに説いたのだった。

4. 同時代の黒人女性活動家たちとの交流と連携

4.1 「バロウズ文書」とバロウズの命名遺産

バロウズの書き残した膨大なスピーチ原稿やあらゆる人々との書簡の控え、ナニー・バロウズ・スクールで使用した教科書やモットー集、さらに教会の日曜学校に参加した子どもたちのサイン帳に至るまで、バロウズに関する史料のほぼ全てが「バロウズ文書」(Nannie Helen Burroughs Papers) となって合衆国国会図書館マディソン館 (手書き文書館) (Library of Congress Madison Building: Manuscript Division) に保存され、全てがオリジナルのまま合計354箱に納められている^[17]。

「バロウズ文書」が合衆国国会図書館手書き文書館に寄贈されたのは、1976年から1977年にかけてのことだった。寄贈を終了して354箱に整理され、一般公開が可能になった段階で、国会図書館発行季刊誌 (*Quarterly Journal of the Library of Congress*) にスタッフによって紹介記事が書かれた^[18]。

バロウズの死後3年目の1964年に「ナニー・ヘレン・バロウズ・スクール」(Nannie Helen Burroughs School) と改名して、私立共学小学校として現在に至っている。[写真3] 紹介記事によると、およそ13万5千点に及ぶ膨大なコレクションは、ナニー・ヘレン・バロウズ・スクールの理事会から寄贈されたという。寄贈当時の校長はアウレリア・ダウニー博士 (Dr. Aurelia R. Downey) であつたと記されている。

文書整理を踏まえて、ナニー・バロウズの生涯と業績を約2頁半に渡って紹介している。加えて1頁を使ってバロウズ自身を映した写真の中でも非常に有名な、帽子とコートで正装した写真^[19]を載せている。[写真4] あと1枚の写真は半頁分で、第一次世界大戦以前のスクールの前にたた

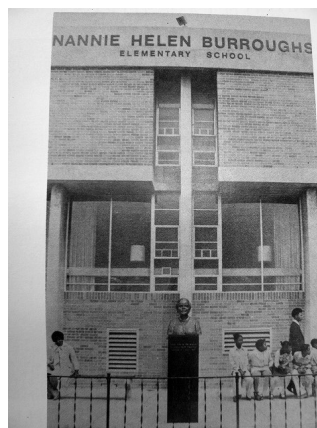


写真3
ナニー・ヘレン・バロウズ・スクール正面 (会報に掲載された写真)

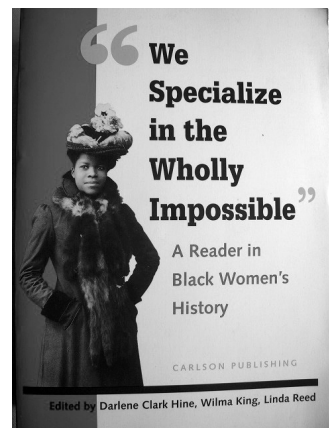


写真4
黒人女性史研究読本の表紙

ずむ9人の生徒たち（白いロングドレスを着用していて1920年代以前だということがわかる）の写真が載っている。

筆者は、2000年と2017年に「バロウズ文書」を開けることができた。2000年は箱の中身の確認だけで個々の史料を読み込む時間はなかったが、2017年夏には4.2で検討する手書き書簡を熟読できた。2000年にも感じたことだが、半世紀前までバロウズが触っていた史料を手にとると、女子教育に生涯を捧げたバロウズの強い意志を感じ、黒人女性史研究者として大いに勇気づけられた。

バロウズの名前を冠した学校ばかりではなく、他にも二つ、彼女の名前が公的に認められたものがある。[写真5] この標識は大通り沿いにあったものを撮影した。すぐそばに全国バプティスト会議（The Progressive National Baptist Convention）の事務所があり、その奥がスクールになっている。加えて彼女の生涯の活動地であった首都ワシントンD.C.限定事例で、まず5月8日はD.C.では「ナニー・ヘレン・バロウズの日」（Nannie Helen Burroughs Day）と1975年に制定された。また彼女の学校のあるD.C.北東部（NE）に位置するデーン街（Deane Avenue）とグラント通り（Grant Street）の一部が「ナニー・ヘレン・バロウズ通り」（Nannie Helen Burroughs Avenue）と改名された。まさに彼女の遺産を実感することができる。



写真5 大通り沿いの標識。
すぐそばに全国バプティスト会議（The Progressive National Baptist Convention）の事務所があり、その奥がスクールである。

4.2 メアリ・ベシューンとの交流と連携

文書館では手書き文書の請求数は1度に4箱までと制限されている。354箱の内訳は、前稿「20世紀転換期の黒人女性教育者に関する覚え書き（2）—ナニー・ヘレン・バロウズ研究をめぐって」浦和短期大学『浦和論叢』第27号、2001年12月、184-85頁に詳細を残した。一般的な書簡（Containers Nos.2-45）、講演原稿（Containers Nos.46-47）、スクールに関する会報や新聞などの印刷物（Containers Nos.315-316）などである。

2017年夏には、一般書簡（1909-1962）のうち、メアリ・マクロード・ベシューン（Mary McLead Bethune）とシャーロット・ホーキンス・ブラウン（Charlotte Hawkins Brown）との書簡を納めたBox3、グラフ雑誌『エボニー』（*EBONY*）を含む書簡を納めたBox8、メ

アリ・チャーチ・テレルとの書簡を含むBox29、ブッカー・T・ワシントン夫人のマーガレット（Margaret J. M. Washington）との書簡を含むBox44を請求して、書簡を読み進めた。

特にベシューンからの手紙には、フロリダに作った彼女の学校（Bethune Cookman College）での講演依頼が熱心に綴られていた。1929年の書簡では、Miss Burroughs で始まっていた手紙は、1934年では親しく“My dear, dear Nannie”と呼びかけていた。この依頼に応じてバロウズはフロリダに出かけたし、ベシューン自身も首都ワシントンに彼女の家^[20]を持っていたので、バロウズ・スクールへ出かけ、二人の交流は続いた。

二人の間で交わされた書簡の主たる目的は、二つあった。まず互いの講演依頼と、さらに寄付依頼であった。講演依頼について以下のような呼びかけをしている。1929年2月13日付の手紙である。「我が校（Bethune Cookman College）25周年記念の初日にあたる3月10日日曜午後に、ぜひ講演をお願いしたいの。フロリダでの1週間は貴女の健康に決して悪くない時候になっているから、前日の9日土曜日にはこちらにいらして」^[21]と依頼状を出している。ベシューンからバロウズに送られたこの種の依頼状はこれだけに留まらない。複数回のベシューンからの依頼にバロウズは喜んで応えて、フロリダまで出かけていた。

他方、寄付依頼をめぐる、ベシューンだけでなく他の黒人女性メアリ・チャーチ・テレルからの手紙も読むことができた。「寄付の依頼は貴女を含めて多数来ていて、皆に応えるために、寄付の額が少しであることを許してほしい」と手紙をつけて\$2の小切手が同封されていた。20世紀前半において、アメリカ社会で黒人女性活動家たちの大きな障害は資金不足であった。男性活動家たちのように経済界からの大規模な寄付を得ることが困難な状況で、個々のネットワーク、小さな寄付金の積み重ねで資金を捻出していたのである。

とは言え、アメリカ黒人女性にも百万長者がいた。美容師として大成功したマダム・C・J・ウォーカー（Madam C. J. Walker）や銀行家として成功したマギー・レナ・ウォーカー（Maggie Lena Walker）^[22]は、活動運営資金を必要とする黒人女性活動家たちにとって頼れる存在だったことは間違いない。1934年に銀行家マギー・レナ・ウォーカーが死去した直後、ベシューンは次のようにバロウズに手紙を送っている。同年12月29日付けの手紙である。この手紙の主目的はバロウズからの資金援助依頼に十分応えられない詫び状だった。「マギー・ウォーカー氏の死去は、私には大きな痛手です。彼女の素晴らしい人格は、彼女の人生における立派な功績、それ以上に素晴らしいものであったと思っています」^[23]とマギーの死を悼んでいた。

11年前の1923年には、ベシューンが黒人女性たちから集めた寄付金を、5回に渡って小切手を同封した手紙でバロウズあてに送っていた。1923年9月14日には\$10、19日に\$8と\$3、22日には\$10、いずれも資金寄付者の名前が記されている。さらに翌月10月9日には\$20、10日にも\$10の小切手が送られていた。9日は二人分の\$10小切手が2枚入っていた。その一人の寄付者の名前が「リッチモンドのウォーカー夫人」と書かれていた。銀行家マギー・レナ・ウォーカーのことである。これらの寄付は、すべてバロウズの職業訓練校への寄付金となった。

10月の手紙には「6月以来連絡をもらっていないけれど、元気になっているの」とバロウズのことを心配する書き出しで、寄付金についての説明がなされている。これら手紙に書かれたバロウズに向けたベシューンからの数々の言葉から、20世紀前半における黒人女性教育者たちの強い思いが読み取れる。これら史料を合衆国国会図書館手書き文書館で読み続けた2017年夏、黒人女性史研究者の筆者がどれだけ勇気づけられたかしかない。

4.3 ナニー・ヘレン・バロウズ・プロジェクト

1961年に亡くなったバロウズの教育観が、21世紀の現在にまで生き続けていることを今年偶然確認することができた。Nannie Helen Burroughsをキーワードに、シヨンバーグセンターでのウェブ検索(biography)で、2012年2月に全米自動車協会HPに掲載された「全米自動車協会(AAA)は黒人月間に合わせてナニー・ヘレン・バロウズに敬意を表した」^[24]という記事を読んだためだった。記事には、1930年にバロウズが肌の色を理由に全米自動車協会の会員から外されていたが、2012年の黒人月間に合わせて、会員として復活することになったとあった。記事ではバロウズの生涯が紹介され、彼女の偉業を讃えている。さらなる情報は以下を参照とあり、HPアドレスのwww.nburroughsinfo.orgが掲載されていた。

これは「ナニー・ヘレン・バロウズ・プロジェクト(NHBP)」というHPで、メリーランド州アナポリスを本部とする非営利団体で、創設者はワイアット元陸軍大佐(Colonel James E. Wyatt, US Army retired)とある。1949年に15歳でヴァージニア州ノーフォークにあるブッカー・T・ワシントン高校を卒業したという、まさに実業教育を受けた黒人男性だが、この企画に関わるまでバロウズのことを知らなかったという。3.2で言及したように、本節では後世への影響を検討していく。NHBPのHP(FAQ)には「なぜナニー・ヘレン・バロウズのことを我々はこれまで知らなかったのだろうか?」という素朴な疑問を投げかけている。

その回答には「歴史家たちのほとんどが男性のため、黒人男性の歴史しか伝えられず、黒人女性の活動家が知られる機会が少ない」とあった。3.2の一部を繰り返すが、1970年代までの歴史研究では、アメリカ史で黒人史は過小評価され、黒人史では黒人女性史は過小評価、女性史では白人女性史が主流、という状態で黒人女性史研究そのものに光が当たるのは21世紀転換期まで待つことになるのだった。

いずれにせよ、歴史研究者の間だけの議論で、一般市民には黒人女性の活躍が届いてなかったことは間違いない。その一般市民に向けて「今こそナニー・ヘレン・バロウズを!」という趣旨でこのプロジェクトは生まれたようである。さらに創設者によって「今のような時代だからこそ、ナニー・ヘレン・バロウズの教育観が必要である」と語られている。現在という時代説明には、本稿「はじめに」で言及した「白人至上主義者」という用語が含まれている。「はじめに」で言及したトランプ大統領の出現によって、1990年代に多文化社会論が展開されたアメリカ社会で一見消滅したかと思われた白人至上主義は、立派に生き残るばかりか、新大統領の暴言に勇気づけられ自分たちの主張を声高に叫ぶ環境が整い始めたのだ

ろう。決して消滅することなく、生き続けた有色人種への差別意識は、健在どころか増長し始めているのかもしれない。

こんな現在において、バロウズが残した言葉の数々は、決して色あせることなく大きなメッセージとなって時代を超えた人々を勇気づけるものになっている。HPには、バロウズの言葉がちりばめられている。いくつか紹介しておこう。「私の教育に賛同しない人はいるだろう。語りかけたとき、拍手をしてくれたとしても、ただその時だけ。私が死んだ後に、私の教育を誰かが伝えてくれれば、賛同してくれなかった人も思い直すだろう。経済的、知的、政治的、社会的改善によって一級市民になることを、貴女に託すわ」^[25]

この言葉は、教え子メアリ・ドーセット（Mary Alice Dorsett：1926-）に向けられたものである。ドーセットは、1947～51年に全米婦女子訓練学校で学んでいる。現在はフロリダ州でビジネス・コンサルタントとして働きながら、バロウズの指導に基づく地域活動にも関わっているらしい。

さらにHPには、バロウズの祖母マリア・ポインデクスター（Maria Poindexter）の言葉として、次のような勇気づけられる語り継ぎがなされている。「そうよ、私のかわいこちゃん。私は奴隷だったの。でも今は違うし、かつてそうだったというだけ。彼らが私の身体を奴隷として束縛していたときだって、私の心を束縛することはできなかったのよ」^[26]と。なんと誇り高い発言だろう。自由を束縛される奴隷だとしても、それは単に身体を奪われただけに過ぎず、心は自由であり続けたこと、自分自身の心を強く保ち続けていたことを、祖母は孫娘に伝えている。奴隷の女性たちの多くがそうして屈従の日々を耐えてきたことが語り継がれている。

HPには、文書ファイル（Document file）も作られていて、7項目の史料が載っている。一つ紹介しておく。バロウズがラジオ放送で行った発言の原稿が、タイプで打たれた文書として残っている。LCの「バロウズ文書」の一部なのであろう。1943年に放送された原稿で、戦時下にあって国家の勝利を信じながら、国内の差別を忘れずにこう訴えている。

「陸、海、空において従軍している兵士たちに敬意を表し、ここに祈る。我々の心、望み、祈り、涙、信念は恐怖と共にあっても勝利を信じる。皆神と共にある」と始めて「黒人か白人か、ユダヤ人が非ユダヤ人かなど関係なく、共に神の元に戦う」と人種や民族に拘わらずアメリカ人として結束して敵に向かうことを説いている。「あなたのアメリカは男性も女性も、善意ある全ての人種の人々が、世界中を平和にするために、単に人種のためではなく神の元の恩恵のために結束するだろう」^[27]と勝利を祈念する言葉で閉じている。戦時下にあって、ラジオを通してのバロウズのメッセージは、アメリカ国民を勇気づけたのだろうか。

5. おわりに

20世紀前半を教育者として生き、1950年代から1964年まで公民権運動真最中の時代を教育の現場の最前線で活躍したバロウズは、20世紀の黒人社会を代表する教育者として黒人少女や黒人女性の生活の向上、知的向上を促すための行動を続けたのだった。巻末にある参考文

献のうち、インディアナ大学マッククラキー教授（Audrey Thomas McCluskey）による二次史料17番『忘れられた姉妹の絆』（Audrey Thomas McCluskey, *A Forgotten Sisterhood: Pioneering Black Women Educators and Activists in the Jim Crow South*, Rowman and Little Field: Lanham, Boulder, NY, London, 2014.）は、その副題の通り、人種隔離制度が社会に定着して、黒人差別が公然と行われていた南部（Jim Crow South）において、教育者や活動家の先駆者となった黒人女性4人を対象に時代を検証した著作である。

この著作第7章の118頁^[28]には同時代を生き、共に黒人少女や女性の教育に生涯を支えた黒人女性教育者7人が、人種を越えた会議が開催されたタスキーギ校を訪問して、ブッカー・T・ワシントンの像の前で写した集合写真が掲載されている。バロウズについて検討した第6章を受けた第7章では、メアリ・マクロード・ベシューンとシャーロット・ホーキンス・ブラウンの教育者としての連携の強さを検討している。同時代の連携、いわゆるネットワークを保ち続けることで、自分一人では動かせない山も動かせるようになるということである。3.3で言及した負の山においても、面前の生徒たちに向かって訴えながら、こうしたシスターフッド（姉妹の絆）によって克服してきたのだろう。

バロウズ自身は一度も結婚せず、まるで神に生涯を捧げたシスターのように、前述したWC（女性会議）や女子教育に生涯を捧げたわけである。彼女の名前の付いた小学校が現在まで教育機関として社会に貢献していることは当然だが、「ナニー・ヘレン・バロウズ・プロジェクト」のような団体が生まれたことには大いに勇気づけられる。前代未聞の言動を続けているトランプ大統領の存在に力を得たかのように、白人至上主義者たちがアメリカ社会に横行している2017年夏に、プロジェクトHPの言葉通り「ナニー・ヘレン・バロウズの言葉を今こそ思い出し、心して向き合いたい」ものである。

アメリカ黒人女性史研究者である筆者の研究集大成として2013年に出版した『物語 アメリカ黒人女性史（1619-2013）—絶望から希望へ』には、30年以上彼女たちが残した言葉を読み続けてきた筆者が得た二つの言葉「私たちは強かったわけじゃない。強くならざるを得なかっただけ」と「あなたにできたのだから、私にもできるわね」が底流にある。2017年夏、合衆国国会図書館手書き文書館で読み続けた史料からも同様の、あるいはそれ以上の「力」を与えられた。20世紀前半に同時代の黒人少女や女性の生活向上、知的向上のために活躍した黒人女性教育者たちの熱い想いは、半世紀以上の時間を超え、筆者に強く語り継いでくれたと確信する。

本研究は、JSPS科研費基盤研究（B）一般 課題番号 17H02409 課題名「共鳴かつ葛藤する闘争—公民権運動の相対化による1960年代の社会的分析—（研究代表者：岩本裕子）」の助成を受けたものである。

註

- [1] 2016年11月大統領選挙の結果が出た直後に新書館から依頼され、2017年3月出版『増補新版アメリカ大統領物語』の編集と、増補分大統領3人（ブッシュ・ジュニア、オバマ、トランプ）の原稿及びコラム「続 映画と大統領」を執筆した。2002年出版の前作『アメリカ大統領物語』の執筆者の一人として、筆者はブキャナン、リンカン、ジョンソン、グラント、ヘイズ、ガーフィールドの6人の大統領の原稿を引き受けていた。編者であった猿谷要先生を始め、複数の執筆者が死去、多くの執筆者退職で、現役は筆者のみだったため依頼され、増補新版の編集、執筆（「増補新版によせて」含む）を行った。コラムは筆者から提案して、前作で執筆したコラム「映画と大統領」の続編を書いた。ちなみにトランプ大統領の頁はpp.196-201である。
- [2] 大統領就任時点で妻に先立たれていて寡夫だったジェファソンには、モンティチェロに身辺を支える女性がいた。ジェファソンの子どもも複数産んだとされている。彼女の名前はサリー・ヘミングス（Sally Hemings）、家内奴隷、つまり黒人女性であった。彼女に関して筆者は以下で紹介した。コラム「大統領の子どもを産んだ黒人奴隷」『語り継ぐ黒人女性』（メタ・ブレーン、2010年）p.78；『物語 アメリカ黒人女性史（1619-2013）—絶望から希望へ』（明石書店、2013年）（以下『物語』と略記）pp.28, 29, 54, 86。
- [3] 筆者は2016年7月以来、浦和大学HPで映画コラム連載を続けている。第3回（2016年12月）では映画『リンカーン』を紹介した。拙稿「憲法修正第13条って何だ？」を参照されたい。
URL：http://www.urawa.ac.jp/news/29437.html；2017年2月のアカデミー賞で、長編ドキュメンタリー賞候補の一つにAmendment 13（憲法修正第13条）と題するドキュメンタリー映画があった。本稿註16で言及するドキュメンタリー「8月28日」も監督した黒人女性監督エイヴァ・デュヴァーネイ（Ava DuVernay）の作品である。
- [4] バロウズ関連拙稿7種を以下に列挙する。本稿の一部はこれらに依拠したが、2017年8月の史料収集によって、下記拙稿に一部修正の必要が出た。本稿をもって最新稿としたい。
1. *JAIG REPORT*「シリーズ黒人女性」連載その7『『黒人の声』誌に投稿した女達』日本グローバル協会、*JAIG REPORT* NO.12、1994年4月
 2. 『『黒人の声』誌（一九〇四～〇七）にみる黒人女性：アメリカ黒人女性の主張の歴史的一考察』『駒澤史学』第47号、1994年6月、136-158頁。
 3. 「ブラック・フェミニズムの源流を探る：『黒人の声』誌（一九〇四～〇七）を手がかりに」『女性学』第2号、1994年6月、173-179頁。
 4. 第六章「ウーマニズム」の思想的萌芽—『黒人の声』誌（1904-07）を読む 第三節 世紀転換期のアメリカ南部に生きる黒人女性「肌の色ではなく人格こそ大切！」『アメリカ黒人女性の歴史—二〇世紀初頭にみるウーマニストへの軌跡』（明石書店、1997年、2000年1月重版）145-147頁。
 5. 「ナニー・ヘレン・バロウズ（Nannie Helen Burroughs: 1879-1961）：『肌の色より人格が大切』と説いた教育者」武田、緒方、岩本共著『アメリカ・フェミニズムのパイオニアたち』（彩流社、2001年9月）286-289頁。
 6. 「20世紀転換期の黒人女性教育者に関する覚え書き（2）—ナニー・ヘレン・バロウズ研究をめぐって」浦和短期大学『浦和論叢』第27号、2001年12月、169-191頁。
 7. 第四章第二節キリスト教教会活動と教育者たち「第一回バプティスト教会全国大会」「ナニー・バロウズと黒人初等教育」「全く不可能と思われることに挑戦する」『物語』141-144頁。
- [5] 拙稿「第36章 黒人の隔離と抵抗—『どん底時代』の黒人指導者たち」『アメリカの歴史を知るための63章 [第3版]』（明石書店、2000年初版、2015年第3版）pp.154-157。

- [6] Nannie Helen Burroughs, *12 things the negro must do for himself*, Written in the 1900's, reprinted in 1968. バロウズ自身によって書かれたこの12項目小冊子を、筆者が手に取ったのは、シヨンバーグセンター所蔵1968年に再版された小冊子だった。当然国会図書館所蔵の箱にもあり、2000年夏にはその箱を確認できたはずだが、2017年夏にはワシントンではなくニューヨークへ移って以降の検索結果となった。
- [7] 本稿に登場するバロウズを始めとする黒人女性活動家、教育者に関する史実は、筆者が所有する人名辞典及び百科事典に基づく。バロウズに関しては、後述する事典では以下の頁である。① *Encyclopedia*, (1990) vol.1, pp.201-205; ② *Encyclopedia* 2nd ed., (2005) vol.1, pp.174-178; ③ *Facts On File* (1997) vol.8, Religion and Community, pp.55-61.この3種の紹介文は、いずれも Evelyn Brooks Higginbothamによる記述で、内容はほぼ同じである。参考文献二次史料一覧も参照されたい。2017年に確認できた事実だが、「バロウズ文書」整理は、1976~77年にAudrey Walker教授によって行われた。このとき文書整理助手だった大学院生が4人いて、その中に Evelyn Brooks Higginbothamの名前があった。この作業によって彼女は、多くのバロウズ関連論文を書くに至ったことがわかった。1986年に筆者がアメリカ黒人女性史専攻を決めた頃、日本では全く史料はなく、史料収集のためには訪米する以外方法はなかった。ところが1990年に、Darlene Clark Hine, ed., *Black Women in United States History*, 16 vols. (Brooklyn: Carlson Publishing Inc., 1990) が出版されて、まさに目から鱗が落ちた。1970年代から80年代にかけてアメリカにおける黒人女性史研究の集大成で、貴重な二次史料であった。この仕事は同じ編者によって黒人女性百科事典出版へと進んだ。本文前述に合わせ番号を記す。① Darlene Clark Hine, ed., *Black Women in America: An Historical Encyclopedia*, 2 vols. (Brooklyn: Carlson Publishing Inc., 1993) であった。21世紀に入った2005年には、さらに再版され3巻本となった。紹介される黒人女性の数が大幅に増えたのだった。② Darlene Clark Hine, ed., *Black Women in America: An Historical Encyclopedia*, 2nd edition, 3 vols. (New York: Oxford University Press, 2005) この再版を待たずに、ほぼ内容が重複するものの、ジャンル別の人名辞典、百科事典として1997年には全12巻に分冊された以下が出版された。前述の大きな百科事典と異なり、小型で軽量なので筆者は重宝して使っている。③ Darlene Clark Hine, ed., *Facts On File: Encyclopedia of Black Women in America*, (New York: Facts On File Inc., 1997) 12 vols.
- [8] この二人の黒人女性は、2冊の黒人女性史拙著（明石書店、1997年+2013年）ではアイダ・B・ウェルズに次ぐ中心的な活動家として随所で議論してきた。クーパーに関しては、バロウズの史料覚え書きと連作で以下も残した。「20世紀転換期の黒人女性教育者に関する覚え書き（1）—アンナ・ジュリア・クーパー研究をめぐって」浦和短期大学『浦和論叢』第26号、2001年6月、83-102頁。この86頁にはバロウズが卒業した名門Mストリート高校（現在はポール・ローレンス・ダンバー高校と名称変更）を、筆者が2000年夏に訪問したときに写した写真を掲載した。この3年後（2014年）には次の共著論文も発表した。拙稿「『女であること』の意味を考える—19世紀末のアメリカ黒人女性教育者の主張」黒人研究会編『黒人研究の世界』（青磁書房、2004年）pp.185-194.; さらにテレルもクーパーもアメリカ黒人遺産記念切手の絵柄になったことを以下で紹介もした。コラム「記念切手になった女たち」『語り継ぐ黒人女性』（メタ・ブレーン、2010年）p.185.
- [9] Nannie H. Burroughs, "Not Color But Character," *The Voice of the Negro*, vol.1, no.7, (July 1904), 277-279.
- [10] ナニー・バロウズに関する下記二次史料で『黒人の声』への彼女の投稿を引用し、彼女の人種に対するプライドはマーカス・ガーヴェイ（Marcus Garvey: 1916年にジャマイカから合衆国に渡

りアフリカ帰還運動で黒人大衆の圧倒的支持を得た黒人男性指導者)の主張に先行すると高く評価している。Evelyn Brooks Barnett, "Nannie Burroughs and the Education of Black Women," Harley & Terborg-Penn eds., *The Afro-American Woman: Struggles and Images*, p.106.

- [11] N.H.Burroughs, 'Black Women and Reform,' *The Crisis*, vol.10, no.4, (Aug.,1915) : 187.
- [12] 第二次世界大戦中には、タスキギ専門学校には航空学校も開設され、全米から選抜され航空教育を受けた卒業生の黒人男性パイロットたちは欧州戦線に配置された。黒人飛行部隊は直接敵を攻撃するのではなく、敵に向かう白人飛行部隊を援護し、彼らを敵から守ることを使命とされた。その援護の現実性が高く評価され、彼らはタスキギ飛行隊 (Tuskegee Airmen) と呼ばれ、後に映画 (Tuskegee Airmen: 1995) や演劇 (Black Angels over Tuskegee: 2013, Broadway play) のテーマとなった。筆者が2017年8月に訪問できた国立アフリカ系アメリカ人歴史文化博物館 (National Museum of African American History and Culture: NMAAHC) の地下2階から1階までの通路には、タスキギ飛行隊が乗った飛行機が天井から吊されて展示されていた。国立航空宇宙博物館入り口に展示されているライト兄弟が乗った飛行機やリンドバーグのセントルイス魂号のように、誇らしげな展示であった。飛行機側面には "Spirit of Tuskegee" と書かれていた。



- [13] *Facts On File* (1997) vol.8, Religion and Community, p.59.
- [14] Darlene Clark Hine, " 'We Specialize in Wholly Impossible' : The Philanthropic Work of Black Women" in *Lady Bountiful Revisited: Women, Philanthropy, and Power*, ed. Kathleen D. McCarthy (New Brunswick: Rutgers University Press, 1990), 70-93. ; D.C.Hine, Wilma King and Linda Reed, eds., *"We Specialize in the Wholly Impossible" : A Reader in Black Women's History*, (Brooklyn, N.Y., Carlson Publishing Inc., 1995) この本は黒人女性史を履修する合衆国の大学生の教科書として編集された。写真5 ; Audrey Thomas McCluskey, "We Specialize in the Wholly Impossible": Black Women School Founders and their Mission, *Signs: Journal of Women and Culture in Society*, vol.21, no.1, 403-26. (vol.22, no.2/winter, 1997 には改訂版掲載)
- [15] *12 Things the Negro must do for himself and 12 Things White People must stop doing to the Negro*, written in 1900's by Nannie Helen Burroughs and reprinted in 1968
- [16] 註12で紹介した国立アフリカ系アメリカ人歴史文化博物館 (NMAAHC) 訪問の顚末は、註3でも言及した浦和大学HP映画コラム連載第12回 (2017年9月4日掲載開始) で紹介した。本稿本文で言及したドキュメンタリー「8月28日」をタイトルとし、アメリカ便りの第2弾とした。ちなみに第1弾は第11回で「マイケル・ムーアのプロドウェイ初舞台」を扱った。註3の説明通り、黒人女性監督エイヴァ・デュヴァーネイの今後に期待したい。以下にURLを残す。
第11回コラムURL : <http://www.urawa.ac.jp/news/33411.html>

第12回コラムURL：<http://www.urawa.ac.jp/news/33494.html>

- [17] 2000年の史料収集では、本稿「はじめに」で言及したように、以下の「覚え書き」を残し、354箱に及ぶ「バロウズ文書」の内容を列挙した。「20世紀転換期の黒人女性教育者に関する覚え書き（2）—ナニー・ヘレン・バロウズ研究をめぐって」浦和短期大学『浦和論叢』第27号、2001年12月、169-191頁。本稿の写真5の2枚は前稿からの転用である。
- [18] “Nannie Helen Burroughs Papers” *Quarterly Journal of the Library of Congress* (Recent Acquisitions of the Manuscript Division by the staff of the division) Oct. 1977, pp.356-360.
- [19] この写真は、註14で紹介した下記の本の表紙に使われている。“*We Specialize in the Wholly Impossible*”: *A Reader in Black Women's History*, (Brooklyn: Carlson Pub., 1995) [写真4]
- [20] ワシントンにあったベシューンの家は、現在「メアリ・マクロード・ベシューン記念館」という国立歴史遺産となっている。筆者がこの記念館を訪ねた経験を含めて、ベシューンに関して以下で言及した。『物語』 pp.169-173, 185, 219, 248, 256.
- [21] Box3 Folder17 of Nannie Helen Burroughs Papers
- [22] マダム・C・J・ウォーカーとマギー・レナ・ウォーカーという偶然ながら同姓の二人のウォーカーは、同時代で経済的に大成功した黒人女性たちだった。筆者は1996年以来、二人をめぐる学会発表をしたり、紹介文や論文を書いてきた。最新稿は以下になる。第4章第3節 経済界で成功した二人のウォーカー 『物語』 pp.147-160.
- [23] Box3 Folder17 of NHB Papers; Box29 Folder6 of NHB Papers
- [24] “AAA Salutes Nannie Helen Burroughs in Celebration of Black History Month.” *PRNewswire*, 9 Feb. 2012. *Biography in Context*; “AAA Recognizes Nannie Helen Burroughs in Celebration of Black History Month.” *Entertainment Close-up*, 14 Feb. 2012. *Biography in Context*.
- [25] www.nburroughsinfo.org (final access Oct.2, 2017)
- [26] *ibid.*
- [27] *ibid.*
- [28] Audrey Thomas McCluskey, *A Forgotten Sisterhood: Pioneering Black Women Educators and Activists in the Jim Crow South*, Rowman and Little Field: Lanham, Boulder, NY, London, 2014.

SELECTED BIBLIOGRAPHY

【Primary Sources】

1. Books (Schomburg Center order number)
 1. Nannie Helen Burroughs, *12 Things the Negro must do for himself and 12 Things White People must stop doing to the Negro*, written in 1900's by Nannie Helen Burroughs and reprinted in 1968 (ScB 07-26)
 2. Chapter 4 "Saving an idea," L. H. Hammond, *In the Vanguard of a Race*, (1922), pp.47-62.
 3. Nannie Helen Burroughs, *The Slabtown District Convention: A Comedy in One Act* imprint WDC [C.1926] 7ed. (NBL p.v.823)
 4. Nannie Helen Burroughs, *What do you think ?*, W.D.C., 1950 (ScC 170-B)
 5. The Fifth Annual Message of NHB: President, Woman's Convention, auxiliary to the National Baptist Convention, USA Inc., W.D.C., delivered in Dade County, Auditorium, Miami, Fla., Sep.10, 1953. (ScD 11-1197)
 6. The Fifth Annual Message of NHB, Denver, Col. Sep.6, 1956. (ScD 14-220)
 7. *A Dream in 1907 comes true in 1956*, W.D.C., publisher not identified (1956) 40 pages: illustrations, portrait 28cm (ScF 14-515)
 8. Nannie Helen Burroughs, *Making your community Christian*, 6th ed., W.D.C.: NHB Publications, 1975 (ScC 06-36)
 9. Nannie Helen Burroughs, *Think on These Things*, W.D.C.: NHB Publications, 1982. (ScC 06-35)
 10. Eds., John M. Gries and James Ford, prepared for The Committee by Charles S. Johnson, *Negro Housing: Report of the Committee on Negro Housing, Nannie H. Burroughs, Chairman.*
2. Articles:
 1. Nannie Helen Burroughs, "Not Color but Character," *The Voice of the Negro*, vol.1, no.7, (July, 1904) : 277-279.
 2. _____. "Black Women and Reform," in "Votes for Women" *Crisis*, vol.10, no.4, (August 1915) : 184
 3. _____. "Nannie Burroughs Says Hound Dogs Are Kicked, but Not Bulldogs," Baltimore, Md., *Afro-American*, (1915)
 4. _____. "With All Thy Getting," *Southern Workman*, 56, (July, 1927) : 277-279
 5. _____. "Eating in Public Places," Washington, *Afro-American*, (14 April, 1934)
3. Manuscript articles: Nannie Helen Burroughs Papers (全354箱)

【Secondary Sources】（出版年順）

1. Evelyn Brooks Barnett, "Nannie Burroughs and the Education of Black Women" in *The Afro-American Woman: Struggles and Images*, N.Y.: Kennikat Press, 1978, pp.97-108.
2. Juanita Fletcher, "Nannie Helen Burroughs" in *Notable American Women; The Modern Period* (1980)
3. Evelyn Brooks, "The Feminist Theology of the Black Baptist Church, 1880-1900," in *Class, Race, and Sex: The Dynamics of Control*, Amy Swerdlow and Hanna Lessinger, eds., Boston: GK Hall, 1983; also containing in Carlson Series vol.1, pp.167-195.
4. Evelyn Brooks, "The Women's Movement in the Black Baptist Church, 1880-1920" Ph.D. Univ.of Rochester, 1984.→この博士論文は後に出版されて8番となる。
5. Evelyn Brooks, "Religion, Politics, and Gender: The Leadership of Nannie Helen Burroughs," *The Journal of Religious Thought*, vol.44, no.2, winter-spring, 1988; also containing in Carlson Series vol.5, pp.153-168.
6. Casper LeRoy Jordan, "Nannie Helen Burroughs" in *Notable Black American Women*, Detroit: Gale Reserch Inc., (1992) pp.137-140.
7. Opal V. Easter, "Nannie Helen Burroughs and her contributions to the adult education of African-American women," Ed.D. Northern Illinois University, 1992→この博士論文は後に出版されて11番となる。
8. Evelyn Brooks, *Righteous Discontent: The Women's Movement in the Black Baptist Church, 1880-1920*, Cambridge, Mass., Harvard Univ. Press, 1993.
9. Evelyn Brooks Higginbotham, "Nannie Helen Burroughs (1879-1961)" in *Encyclopedia* vol.1, Carlson (1993), pp.201-205.
10. M. G. Synnott, "Nannie Helen Burroughs," in M. S. Seller eds., *Women Educators in the United States, 1820-1993: A Bio-Bibliographical Source book*, Westport, Conn.: Greenwood Press, (1994), pp.71-78.
11. Opal V. Easter, *Nannie Helen Burroughs*, New York: Garland Pub., 1995.
12. Evelyn Brooks Higginbotham, "Nannie Helen Burroughs (1879-1961)" in *Facts on File (Religion and Community)*, (1997), pp.55-61.
13. Victoria W. Wolcott, " 'Bible, bath, and broom' : Nannie Helen Burroughs's training school and African-American racial uplift", *Journal of Women's History*, vol.9, no.1, Spring 1997.
14. Traki Lynn Taylor, "God's School on the Hill: Nannie Helen Burroughs and the National Trainng School for Women and Girls,1909-1961" Ph.D. Univ. of Illinois at Urbana-Champaign, 1998.
15. Karen Ann Johnson, *"Uplifting the Women and the Race": A Black Feminist*

Theoretical Critique of the Lives, Works and the Educational Philosophies of Anna Julia Cooper and Nannie Helen Burroughs, New York: Garland Pub., 1999.

16. Evelyn Brooks Higginbotham, "Nannie Helen Burroughs (1879-1961)" in Darlene Clark Hine, ed., *Black Women in America: An Historical Encyclopedia*, 2nd edition, 3 vols. (New York: Oxford University Press, 2005) vol.1, pp.174-178.
17. Audrey Thomas McCluskey, *A Forgotten Sisterhood: Pioneering Black Women Educators and Activists in the Jim Crow South*, Rowman and Little Field: Lanham, Boulder, NY, London, 2014. Chapter 6 "Telling Some Mighty Truths": Nannie Helen Burroughs, Activist Educator and Social Critic, pp.101-116. Chapter 7 "The Masses and the Classes": Women's Friendships and Support Networks among School Founders, pp.117-139.

Summary

The Heritage of African American Woman Educator — Focusing on Nannie Helen Burroughs Elementary School —

Hiroko Iwamoto

The aim of this paper is to reconfirm the heritage of Nannie Helen Burroughs (1879-1961), educator, orator and activist. She was a pioneer in the education of African-American women in the early 20th century. She founded the National Training School for Women and Girls in Washington D.C. In 1964, 3 years after her death, this school was renamed and has been existent as Nannie Helen Burroughs elementary school.

In 2017 summer I could research at Madison Building (Manuscript Division) of Library of Congress and read some boxes of Nannie Helen Burroughs Papers (total 354 boxes). In the box 3, 8, 29 and 44 there are the general correspondence (1909-1962) between some contemporary activists, such as Mary McLead Bethune, Charlotte Hawkins Brown, Mary Church Terrell and Margaret J. M. Washington. Reading their correspondences made it clear that the educators and activists in those days tried to make the advancement in the social status of African-American women as soon as possible.

Keywords Nannie Helen Burroughs, African American women, educator

(2017年10月5日受領)

